ポリグロシア　第５巻（2002年３月）

伝承説話からみる日本と韓国のかかわり
－百合若説話を中心に－

金　　賛　會

要旨

本稿で論じる百合若説話は、日本全国に広く伝承されているが、その伝承の故郷は九州特に大分と言われてきた。しかしなぜその内容が大分地方、九州地方を主な舞台として語られているのか、つまりなぜ大分、九州なのかが解明されていない。また大分の柞原八幡（宇佐八幡）の前世物語として語られるシャーマンによる日本の「百合若説経」は、なぜ物語の一番初めに＜内裏建立の段、鬼神揃神明帳＞が置かれ、結末のところに＜屋敷堅弓打初の段＞が設けられているのか、従来の諸研究ではその理由を追求した論考はなかった。あるいはまた、百合若説話がどのような経路を経て日本に伝わり、その運搬者は誰なのかがはっきりしていない。本稿ではそのなぞを、日本の「百合若説経」にきわめて類似している韓国シャーマンによる本解「成造クッ」を通して明らかにし、日本と韓国の文化交流について論じている。

キーワード：大分の柞原八幡（宇佐八幡）の前世物語、韓国の建築申の前世物語、大分の宇佐神宮と韓国

１．はじめに

「皆さん今日は寒いですね」。最近、私はキャンパスで人に会ったらこのように「今日は寒いですね」「今日はとても暑いですね」「今日は良い天気ですね」など、挨拶として天気の話をよくするようになった。私がはじめて日本に来たのは今から十年も前であるが、学校のエレベーターの前で会った日本人の先生が私に向かって「今日はとても寒いですね」と挨拶してくるのであった。その時私は「そうですか、やあ、今日はあまり寒くないんですけどね」と答えた。するとその日本人の先生はなぜか腑に落ちない顔を見せたのが印象に強く残っている。日本人はこのように天候のことをよく挨拶に使うということを知ったのはそれ以来ずいぶん経ってのことであった。韓国では本当に寒いとか、暑いとかではないと挨拶として天候のことを持ってくることはあまりない。

また、日本に初めて来たときは、日本人が木村さん、田中さん、佐藤さんと、苗字だけを呼ぶのが不思議に感じられた。私に対しても「きむさん」、または「きんさん」と呼んでくるのであった。韓国の姓の数は日本と比べてきわめて少ない。韓国のソウルに南山という山があるが、そこに登って石を投げて当たった人に聞けば金さんか李さんか朴さんという表現がある。日本人の姓の数は、約20万と言われているが、韓国には約237の姓しかない。この中で金さんが22％で５人に１人、李さんが15％、朴さんが９％で、この金、李、朴の３姓だけで韓国総人口の約半分ぐらいを占めている。お互いに呼び合うときに「キムさん」と呼ぶと、何人も返事してくるので、韓国では苗字と後の名前を一緒に呼ぶのが一般的である。それに慣れていた私にとって、日本人から「キムさん」と呼ばれたとき、不思議に思ったのは当然であったかも知れない。

異文化を理解するためには言語学習とともにその国の文化や歴史などについての学習も並行する必要があると思う。アンケート調査などをしてみても、最近の学生達は言語学習とともに文化や歴史なども知りたいという学生が多い。

そこで本稿では九州がその伝承の故郷と言われている百合若説話を取り上げ、韓国の百合若説話とのかかわりを通して九州と韓国、日本と韓国の文化交流について考えてみたい。

2．日本の百合若説話

2．1　大分の百合若伝説[1]

（一）昔、左大臣・公光の息子で、豊後（大分）の国司に百合若という人がいた。百合若は強力な力持ちで常に鉄弓を用いていた。〔百合若の登場〕

（二）百合若は時の天皇の勅命により、侵略してきた蒙古軍を征伐するために戦場に向かって出発する。〔勅命〕

（三）百合若は対馬の沖で蒙古軍と激しく戦い、神の加護によって大勝を得る。〔蒙古軍退治〕

（四）百合若は本土に帰ろうとして軍船を引き連れて玄海島に立ち寄るが、生まれつきの癖としてそのまま眠り続けた。その時、部下の別府太郎（貞澄）・別府二郎（貞貫）は眠る百合若を一人密かに孤島に捨て置いて、軍船を率いて豊後に帰る。〔部下の裏切り・孤島放置〕

（五）別府兄弟は朝廷に百合若が戦死したと偽って数々の戦果を報告し、その褒美として百合若に代わって豊後の国司となる。また、別府兄弟は百合若の妻・春日姫に道ならぬ思いを寄せていろいろと苦しめた。〔横恋慕〕

（六）春日姫が何としても別府兄弟の心に従わないので、遂には近くの池に沈めて殺そうとまでした。その際、門番の翁は密かに自分の娘・万寿姫を春日姫の身代わりとし、菰（まこも）の生茂った池中に身を投げさせた。〔万寿姫の死〕

（七）春日姫は嘆きの内に百合若が可愛がっていた鷹の緑丸に手紙を結びつけて放すと、緑丸は雲間を飛んで玄海島の百合若のところに至る。緑丸を見て、百合若は大いに喜び、指を噛み切って流れる血で手紙を書いて緑丸の足に結びつけて豊後に帰らせた。春日姫は百合若の無事を知り、再び硯と筆墨を緑丸に付けて放す。しかし、その重さに耐えかねた緑丸は玄海島の近くに辿り着いたものの、海に沈み、その遺体だけが百合若の元に流れ着く。〔鳥の文使い〕

（八）その百合若にも幸運が訪れた。嵐のため漁船が玄海島に流れ着き、百合若はそれに乗って豊後に帰ることができた。〔帰国〕

（九）豊後に帰ってきた百合若は別府の邸に僕として住み込み、姿をやつして名を苔丸と称した。〔苔丸変身〕

（十）正月の弓始めの式を挙げる時、苔丸は矢取りの役を努めさせられるが、別府の弓術を見て大いに嘲笑った。別府兄弟はこれに大いに怒り、苔丸を呼んでかつて百合若が使った鉄の弓矢を持ち出して射させた。苔丸は弓矢を受け取って立ち上がり、別府兄弟に向かってその不忠義を責め、「吾こそは汝のために苦しめられた百合若である」と名乗って、ただの一矢で逃げる別府兄弟の背を貫通して殺した。あるいは、百合若は逃げる別府兄弟を追っかけて別府市の石垣の辺りで射殺したともいう。〔報復〕

（十一）こうして百合若は再び豊後の国司となり、妻の春日姫と幸せな日々を送る。〔再会〕

（十二）百合若は春日姫の身代わりとして池に身を投げ死んだ万寿姫のために寺を建立し、池と姫君とに因んで菰山万寿寺と号する。また、死んだ愛鷹・緑丸の菩提を弔うために高雄山神宮寺を建立する。〔万寿寺縁起〕

（十三）後、百合若はこの地に没したが、その遺骨を葬ったのが現在の百合若大臣塚であるという。〔百合若大臣塚の由来〕

この「百合若伝説」は、大分だけではなく、北海道から沖縄まで日本全国に広く伝承されているが、特に九州、大分に集中して伝承されている。また、その内容も主に豊後（大分）、九州地方を舞台として語られている。こういうことから従来、この百合若伝説の故郷は九州、特に大分であると言われてきた。この百合若説話以外にも大分がその伝承の故郷と言われているものには、「真名野長者伝説」がある。すなわちそれは、炭焼小五郎という貧しい青年が神様のお告げではるばると奈良の都から訪ねてきた姫君と結ばれ、たくさんの黄金を発見して長者となるという話である。しかし、今まで何故、大分にこの百合若伝説が集中して伝承されているのか、また、何故その内容が大分地方、九州地方を主な舞台として語られているのか、つまり何故大分、九州なのかが解明されていないのが現状である。本稿ではこの謎も韓国の百合若説話と関わって検証してみたい。

現在の菰山万寿寺
（大分市金池町所在）

万寿姫が身を投げて死んだと言われる菰ケ池
（大分市上野ケ丘東所在）

2．2　幸若舞「百合若大臣」

百合若説話が中央の歴史舞台にはじめて登場するのは、室町時代成立の幸若舞の「百合若大臣」である。その梗概をあげると次のようである[2)]。

〈発端〉

（一）嵯峨天皇の御代、左大臣公満公は一人の子供もないことを嘆き、長谷の観音に申し子を乞う。やがて願いが叶って男の子が誕生、夏の半ばの若子なので百合若と名付ける。〔申し子誕生〕

（二）長ずるに及んで百合若大臣に昇り、三条の壬生大納言顕頼の美しい姫君を御台所に迎える。〔結婚〕

〈展開〉

（三）ある年、六天魔王の命によって、むくりの大軍が筑紫に押し寄せ、日本は危うくなる。そこで百合若が軍勢を率いて筑紫に赴く。〔勅定〕

（四）百合若大臣は豊後の国府に御台所を留め、八万艘を整えて、むくりの陣をとる唐土と日本の潮境の千倉ケ沖に向かう。むくりは、「りやうざう」「火水」「飛雲」「走る雲」の四天王を大将にして四万艘で激しく戦う。しかし、百合若は神々の加護の元に黒金の弓矢で攻め立て、むくりのすべてを討ち滅ぼす。〔むくり退治〕

（五）百合若大臣は、戦いの疲れを癒すべく玄海島に立ち寄り、暫し微睡むが、大力の癖とてそのまま三日三晩眠り続ける。その折、家臣の別府兄弟は百合若の知行を横取りせんと企み、眠る百合若を一人密かに孤島に捨て置き、一行を連れて豊後の国府に戻る。〔部下の裏切り・孤島放置〕

（六）別府兄弟は、御台所に百合若の討ち死にしたる旨を伝え、形見の品とて黒金の弓などを渡す。やがて、兄弟は上洛してむくり退治のさまを奏上し、天皇から筑紫の国司を賜る。別府は百合若の御台所の美しさに恋慕して、北の方に迎えようとするが、御台所は宇佐八幡への参籠祈願にことよせて、別府の申し出を拒絶する。〔横恋慕〕

（七）御台所が嘆きのうちに百合若愛鷹の緑丸に最後の飯を備えて放すと、その飯を銜えて玄海島の百合若の元に至る。百合若は緑丸を見付けて、柏の葉に指の血で便りをしたためる。御台所は緑丸の文によって夫の無事を知り、長い文に硯を付けて再び緑丸を放す。しかし、今度はその重さに耐えず、緑丸は海に沈み、その遺体だけが百合若の元に流れ着く。〔鳥の文使い〕

〈展開〉

（八）御台所は悲しみの余り、宇佐八幡に参籠して、百合若の帰郷を祈願する。その甲斐あって、たまたま壱岐の浦の釣人が玄海島に吹き寄せられ、異形の姿の百合若を見付ける。やがて百合若は神仏に順風を祈念し、その釣人に連れられて博多に戻る。〔帰国〕

（九）国司の別府が鞆の浦人の興なる者を拾って養うことを聞き、百合若を引き出させ、いずれ都の物笑いの種にしよ

うと門脇の翁に預ける。翁は情あるもので、苔丸百合若をかつての主と知らずに扶持する。そこで百合若は、その翁夫婦の一人娘が別府に従わぬ御台所の身代わりとなって、満能ケ池に沈められたことを知る。〔苔丸変身〕

〈結末〉

（十）あくる正月、宇佐八幡の弓の頭、苔丸と称された百合若は、矢取りの役を勤めさせられる。百合若はあえて悪口を弄し、別府の怒りを誘う。別府はついに百合若に弓矢を射ることを命じるので、百合若は宇佐八幡の宝殿に納められた自らの黒金の弓矢を取って、裏切りの家臣の別府を討つ。〔報復〕

（十一）御台所は夢心地のうちに百合若を迎える。〔再会〕

（十二）百合若は宇佐八幡にお礼の祈願を果し、鞆の浦の釣人や門脇の翁などに恩賞を与える。〔恩賞〕

（十二）百合若は御台所を伴ってめでたく都へ戻る。やがて参内してことの次第を申し上げ、日本の将軍に任ぜられる。〔栄華〕

この「百合若大臣」は幸若舞という祝言芸能であるが、発端部分に、〔申し子誕生〕、すなわち百合若が実は長谷観音の申し子であるということ以外は前述の大分の百合若伝説と大きな違いは見られない。

２．３　大分の柞原八幡神（宇佐八幡神）の前世物語としてのシャーマンの「百合若説経」

百合若説話成立の謎を解明するために、私が一番注目しているのが、大分の柞原八幡神（宇佐八幡神）などの前世物語として語られる「百合若説経」である。これは壱岐のシャーマンが語るものである。

この「百合若説経」について折口信夫氏は「壱岐民間伝承採訪記[3]」において、壱岐には百合若説経を書いた書物が少なくとも二本あり、この説経は宇佐・由須原（柞原）両八幡神の本地物となっていると論じておられる。この「百合若説経」はイチジョウという巫女が語るものであるが、そのイチジョウが祀るのは天台ヤボサ神である。二・四メートルほどの黒塗りの弓を二本の竹で叩く。そして、弓を叩いて神寄せから始めて次に御籤あげをしてそれが済むと、百合若説経をよいほど唱える。このようにおつとめをする中に、生き霊・死霊が皆寄って来る。最後には祭り収めをして神様を送り、生き霊・死霊を送るという順序である[4]。また山口麻太郎氏は、壱岐にはイチジョウによる「百合若説経」が三種類伝承されていることを論じておられる[5]。

さらに対馬にもシャーマンの旧法者・命婦家の神楽祭文として「百合若説経」が伝承されていたことが報告されている。それは、早稲田大学坪内博士記念・演劇博物館「対馬の芸能資料展[6]」と倉田隆延氏「＜翻刻＞対馬の神楽祭文『百合若説経』（国分文一氏所蔵[7]）」によってその存在を知ることができる。山口麻太郎氏の「百合若説経」は全体で十段構成になっているが、第一段は〈内裏建の段、鬼神揃神明帳〉の段をもって始まる。

住吉の松に雀がすをもりてさこそ雀の住みよかるべし

鬼神揃を申也。七鬼神しやうりん御前鬼子母神此弓音にてそろへ見てくら神にぞ移す也。御先揃を申す也。御先はみぢんのごとくと申せども今日今晩此段に揃ゆる御先の数を改め今ぞ揃ゆる。一億八千六百七十四人の御先をこの弓音にてそろへみて御先幣にぞ移す也。内裏建する目出度さよ。日本我朝にて島のはじめはあわじ島、嶽のはじめは高すか嶽、山の始は高野山、姫のはじめは小野小町ととかせ給ひける。扨又都に当りては六條内裏と建て始て皇主目出度おわします。日本の御主をたんたい将軍殿と申奉る。長者の御所を初て被下ける。先ず東の御所を朝日の御所と召されける。壱の御所にてましませど位高くぞおわします。長者の御名をば朝日の長者申す也。六條内裏に参内有り御礼のべさせ給ふには左御座の五畳重にて対座の御礼述べさせ給ふ。かほど位は高きと申せ共ひんなる事こそ是非もなし。（中略）扨又西に当りて氏子もなき二條の屋形と申にましますは千のたからも万のたからも持たせ給へば則其名をば万の長者と名付けたり。万の長者のいぜいのほどこそ目出度けれ。先ツ一番に東の御蔵を詠れば春の体と飾り立小金の林を七林、南の御蔵を詠れば夏の体と飾り立赤金林を七林、西の御蔵を詠れば……

と〔神迎え・内裏建立〕をもって始まる。右では最初に巫女のイチジョウが木の弓を叩いて、鬼神・一億八千六百七

十四人などの神々を呼び降ろす。次には「内裏建する目出度さよ」と内裏を初めて建てた建築神を誉め称え、その神を降ろすものと考えられる。次には主人公・百合若大臣の血統を述べるために百合若の父である万の長者を登場させ、朝日の長者と宝比べをさせるという形となっている。私がここで注目したいのはこの〈内裏建の段、鬼神揃神明帳〉の段である。今までの諸先学の研究では、何故、この「百合若説経」は大分の「百合若伝説」や室町時代に成立した「幸若舞」に見えない〈内裏建の段〉をもって始まるのか、その理由を論じた論考はなかった。何故、この〈内裏建の段〉をもって始まるのか、私は主人公百合若はもともとは建築神ではなかったか、と密かに考えているのである。そこで、シャーマンによる「百合若説経」の梗概をあげる次のようである。

〈発端〉

（一）二条の屋形に住む万の長者は、万の宝は持っているが、位が低いので六条内裏の訪問の際に、宝を持たない朝日の長者よりいつも末席に座るのを悔やんで朝日の長者に三度の手紙を送って宝比べを申し出るが、子供がないのが原因で負けてしまう。〔宝競べ〕

（二）宝競べに負け、恥辱を受けた万の長者は、一人の子供もないことをを嘆き、夫婦ともに清水観世音に申し子をすると、観世音は、前世の因果によって授ける子種がないと告げる。それでも子供がほしいと決死の覚悟で観世音の利益に縋って祈ると、十四日目の暁に観世音は八十ばかりの老僧の姿で現れ、左の手には水晶の数珠、右の手には一本の百合の花を持って、「日本一の大力の若なるべし。年は十五歳の春の頃、事が出来て叶ふまじ。其時、我をばうらみもうすなよ」と、若君の誕生を告げる。やがて、若君が生まれ、八幡宮の秘蔵の百合の花を象って百合若の大臣殿と名付ける。〔観音の告げ・申し子誕生〕

（三）七歳の登山の年になった百合若は、鞍馬山に入り、当光坊の元で修行を続ける。百合若は一字を書いては二字を読み、二字を読んでは三字を悟り、仮名・真名の文字まで書けるようになり、十一歳の時には学問のすべてを成就した。さらに天狗の秘法を教えられ、大天狗から形見のものとして鉄の笠と鉄の扇をもらい、十五歳で山を下った。〔入山〕

（四）百合若の山下りを喜んだ長者夫婦は、百合若の結婚の相手を探す。そこで美しい六条内裏の輝日の御前が結婚の相手として選ばれる。百合若は、愛馬の鬼鹿毛に乗って輝日の御前の住む六条内裏に忍んで入り、御前と契りを結ぶ。そして輝日の御前を連れて二条の屋形に帰る。〔結婚〕

〈展開〉

（五）六条内裏の輝日の御前の父の将軍は、姫君の行方が分からないので博士を呼んで占わせると、姫君が百合若に伴われ、婚礼のお祝いをしていることがわかる。怒った父の将軍は、唐と日本の潮境である千倉が沖を過ぎた所の鯨万国に住む鬼退治を命じた。百合若は、父の形見の青葉の笛、母の形見の唐木の数珠、妻・輝日の御前の形見の鬢の黒髪を持参し、輝日の御前と別れを惜しんで四万八艘の軍船と共に鯨万国に向かって出発する。〔将軍の勅定〕

（六）百合若一行の船は小島に至り、天狗の化身という一人の翁に鯨万国を教えられ、鯨万国に着いて五万の小鬼と激しく戦う。百合若は神仏天狗の力を借りて小鬼のすべてを退け、最後に残った大将の三面鬼神悪毒の首も百合若が天から呼び下ろした小鍛冶の力を借りて切り落とす。〔鬼退治〕

（七）三面鬼神悪毒を退治した百合若に五万の小鬼のなかで生き残ったひばら童子という一匹の小鬼が近づいて来て、百合若に法螺貝と共に酒を勧める。百合若が酒に酔い伏して、浜で深い眠りに入っている間に部下の式部兄弟は、百合若の知行を横取りしようと企み、百合若を孤島に捨て置き、本国の六条内裏に帰る。〔部下の裏切り・孤島放置〕

（八）式部兄弟は本土に帰り、将軍に百合若は鬼の虜になって、兄弟が五万の鬼をすべて退治してきたと偽り、その褒美として将軍から新地諸領と二条の屋形を拝領する。また、式部兄弟は輝日の御前に百合若が鬼の虜になったと伝え、兄の式部は、「今宵より我そふ妻となびかせ給へ輝日の御前」と、輝日の御前を誘うが、輝日の御前は、

六年六月待ってくれと言って、二条の屋形から移って八町原の西に柴の庵を結んで住む。〔横恋慕〕

〈展開〉

（九）柴の庵で苦しい生活をしていた輝日の御前は、ある夕方、百合若がふだん可愛がっていた小鷹を見て、「汝も生ある鳥ならば鯨万国へ飛び渡り、大臣殿の御有家を見届け参らせ我に知らせよ、小鷹いかに」と言うと、小鷹もあっと答える風情をして鯨万国に飛び渡った。その時、磯辺に出た百合若は小鷹に似た鳥が飛んでくるのを見て、「若小鷹て有ならばも是に～」と、左の拳を差し上げ招き寄せ、都の様子などを聞いて、手紙を書こうとしても墨も硯も紙もなかった。すすきの穂を筆とし、弓手の小指を石に擦って流れた血で便りをしたため小鷹に託すと、小鷹は日本の方に向かって空高く飛んでいった。輝日の御前と長者夫婦は、小鷹の血文によって百合若の無事を知り、墨紙筆硯と品々を付けて再び小鷹を放す。が、今度はその重さに耐えず、小鷹は海に落ちて空しくなり、その遺体と文が百合若の元に届く。小鬼のひばら童子が岩屋から持ち出した蘇生の薬によって小鷹は甦り、清水詣でのお願いの手紙を添えて日本に帰される。〔鳥の文使い〕

（十）輝日の御前と百合若の母の祈願の声を聞いた清水観世音は、宮崎浦に住む太郎・二郎・三郎の三人の漁師の枕元に現れ、早速鯨万国に向かって出発するよう命じる。鯨万国に入った三人の漁師は助けを求める百合若を船に乗せ、百合若を鬼と間違え、船の道木に麻の綱で百合若を巻き付けて宮崎浦に運ぶ。〔帰国〕

（十一）鬼と間違えられた百合若は、三郎の女房から縁欠けの敷物にご飯を与えられ、はつぱの苔丸と名付けられる。また、柴刈りを強いられ十二人の柴刈りと一緒に出かけ、柴を刈ることができないので、父からもらった青葉の笛を吹いてみんなを喜ばせ、柴刈りの代わりにする。百合若は、「我を誰とか思ふらん古よりの百合若成るぞ」と身分を明かし、太郎兄弟に別れを告げて都の取上げ婆の庵に着く。〔苔丸変身〕

〈結末〉

（十二）取上げ婆は、かつて百合若が好んだ婆舞いを舞って百合若を笑わせ、口の奥の牙で百合若であることがわかり、八丁原の輝日の御前の庵に着き、自殺寸前の輝日を取り止め、百合若の帰国を伝え、二人はめでたく再会する。〔再会〕

（十三）百合若は、取上げ婆を式部兄弟のいる二条の屋形に送り、片目潰れの片跛が奉行を望んでいると、式部兄弟に言わせ、愛馬の鬼鹿毛に乗って、「我をば誰と思覧、汝じ鯨万国に捨ておいたる古への百合若也」と名告って、弟の別府の二郎を射殺す。また、式部の太夫を天狗秘法の柴繋の法に繋ぎ留め、六条内裏に赴き、鯨万国からの帰国を報告する。将軍は自分の装束を百合若に譲り、百合若を日本の将軍と定める。式部の太夫は牢から取り出し、七嶺七谷を引き回し七日七夜の晒しものにした後、首を切り、その死骸は簀巻きにして唐と日本の潮境の千倉が沖に捨てる。弟の別府二郎の死骸も簀巻きにして嘉茂川に捨てて、百日過ぎてから兄弟の死骸を畜生道に落とす。〔報復〕

（十四）百合若は宮崎浦に住む三人の漁師、植村に住む十二人の柴刈りを呼んで恩賞を与え、二条の屋形を新しく建て直し、休みの御所と名を改め、取上げ婆を呼んで官位を与える。〔恩賞〕

（十五）百合若は再度鯨万国に渡り、小鬼のひばら童子のために手長男神社（壱岐）を建て、玄海島には小鷹大明神を勧請し、八十八歳の生を終え、豊後（大分）の国の由生原（柞原）八幡大神として現れ、輝日の御前は肥前国（佐賀）の神・川上淀姫大明神（あるいは宇佐八幡神）として現れる。〔神々示現〕

そして、この「百合若説経」の最後の＜屋敷堅弓打初之事＞は、

抑屋敷かためを細にどくじゆし奉る。此御屋敷と申奉るは東をかためて祈也。

偖四方堅と申には是より東の方天の色を祈申ては青木方を祈也。其地に㐂どを申せば甲乙の方也。神を祈申せはみかどの神を守護し給ふ。西をかためて祈也。……

と、発端の〔内裏建立〕と関わって〔屋敷堅め〕が語られる。次には〈神送り事〉〈鬼神送り御先送の事〉として、

是より鬼神送りを申也。七鬼神しやうりんに御前の御前に鬼神しん此弓音にて村雲霞の内にむすび上るを天上申

てうがみをなせ。是より御先送りを申也。御先はみじんのことくと申せども今日今晩の此段に揃ゆる御先の数を改ししゆうを揃へる。今社送るよ。一おく八千六百七十二人の御先を此弓音にて村雲霞の内にむすび上るを天上申てうがみをなせ。是より山の御先は山に帰れ。野々の御先は野に帰れ。川の御先は川に帰れ。海の御先は海に帰れ。堀の御先は堀に帰れ。此弓音にて村雲霞の内にむすび上るを天上と申てうがみをなせ。是より得さする物を請取らるべし。くだ物しとぎ花米たとふ紙迄引や揃へて得さするなり。六ツのしとぎは鬼神～に得さするなり。六つのしとぎは御先～に得さするなり。此弓音にて村雲霞の内にむすび上るを天上申てうがみなせ。

鬼神送り御先送り終り　後　〔神送り〕

と、冒頭の〔神迎え〕に対応する〔神送り〕の形で招き降ろした鬼神・一億八千六百七十二人の神々を天上に送り返す叙述で結んでいる。

前述したように、なぜ、この「百合若説経」は、一番最初に〔内裏建の段〕を設け、結末のところで〔屋敷堅めの段〕を設けたのか、一見して「百合若説経」とはまったく無関係にみえるが、その理由は何なのかということであるが、私はここに「百合若説経」の本当の姿が秘めれていると考えている。すなわち、シャーマンによる「百合若説経」はもともと家を建てる建築神の由来譚であったことが推測される。

そこで、このシャーマン（巫女）による「百合若説経」と最初にあげた大分の「百合若伝説」、室町時代成立の幸若舞「百合若大臣」の違いはどこにあるのかをみるためにそのモチーフ構成を対照して示してみることにする。

〈対照表〉

右のようにシャーマンによる「百合若説経」には見えるが、大分の「百合若伝説」と幸若舞「百合若大臣」には見当たらないモチーフとしては、発端の☆〔神迎え・内裏建立〕、(一)〔宝比べ〕、(三)〔入山〕、そして結末の（十五）〔神々示現〕と☆〔屋敷堅め〕、☆〔神送り〕のモチーフである。すなわち、発端の☆〔神迎え・内裏建立〕から結末の☆〔屋敷堅め〕、☆〔神送り〕のすべてのモチーフを整っている伝承がシャーマンによる「百合若説経」であり、百合若説話の古い姿を保っていると言える。

3．韓国の百合若系説話

3．1　済州島の伝説「ノギル国正命水[8]」

（一）昔、ある寡婦に二人の息子があり、兄は結婚して別に暮らし、弟が母と一緒に暮らしていた。たまたま母親が病気で倒れてしまったので、弟は占い師に尋ねると、ノギル国に行って正命水を買って飲むと治るという。弟は早速兄の所に行って一緒に行こうと誘うが、兄は怒りながらこれを拒んだ。〔母親の病気と正命水〕

（二）弟は村の長老達を尋ねノギル国を聞いてみると、三カ月十日船に乗って行かなければならない遠国であるという。弟は今まで貯めて置いたお金で船を借りてノギル国に向かって出発した。航海の途中、魚みたいな怪物に出会って危険にさらされるが、日光菩薩、西光菩薩、玉皇上帝、龍王婆さんに祈って助けられ、十日目にノギル国に着くことができた。〔海上遍歴〕

（三）弟はすぐ正命水の薬屋を探し、薬剤師から薬の飲み方などを丁寧に教えられ感謝の言葉を述べてそれを持って帰国の船に乗った。〔正命水の獲得〕

（四）数日にわたっての航海の末、やがて船は故郷の近くに至った。兄は一隻の船に乗り近づいて来て、「兄弟が一緒にノギル国に行って薬を求めてきたと言ったら母は喜ばれるだろう」と言い、薬を奪って弟の両眼を抉り抜き、船の底を刺して沈めた。兄は平気な顔で母のところに行って、「私達の兄弟がノギル国に行って正命水を求めて来ました」と言い、母に弟のことを聞かれると、すぐ帰って来ると答える。〔兄の裏切り・弟の盲目〕

（五）弟は船から落ちた板に乗って漂流し、ある島に着いて竹で横笛を作って吹くと大勢の人が集まって来た。村人に事件の一部始終を語ると可哀想に思った彼らは食事を提供してくれた。不思議なことに毎晩梟が飛んで来て羽で寝床を作ってくれたので村人らは弟を天から降りてきた人間だとこそこそ言った。〔孤島漂着・笛の上手〕

（六）その日もいつものように村人らが集まって弟の横笛を聞いていた。どこからか一羽の鳩が飛んで来て、「グウグウグルグル」と鳴いた。村人らが鳩を捕まえて見ると、首に母から送られてきた一通の手紙が括られていた。その手紙を読めない自分を嘆きながら拳で目を擦ると見えなかった目が見えてきた。返事を書いて鳩の首に括って放してやると悠々と羽ばたきながら飛んでいった。〔鳥の文使い・盲目回復〕

（七）その国の王の姫君が横笛の名人である弟の噂を聞いて宮中に招いた。王の姫君は弟の吹く横笛に魅了され、妻になることを希望したので二人はめでたく結婚する。弟は王の姫君を連れ、船に沢山の財宝を積んで故郷に向かって出発した。〔結婚・同行帰郷〕

（八）一方、母親はノギル国の正命水を飲んで病気は全快したが、待っても帰って来ない息子のことのみがいつも心配であった。鳩が伝えてくれた息子からの手紙を読んで無事であることを知って喜ぶ。機嫌のいい母の行動を不審に思った兄は母の留守の隙に部屋を探し、箱に入っている弟からの手紙を見つけ出した。弟の帰国を知った兄は村の若者を連れて弟の船を襲撃する。が、その時どこからか七羽の鳩が飛んできて兄の船に砂を撒いた。目を開けられなくなった兄の一行は弟に破れてしまった。〔鳩の援助・報復〕

（九）　弟は村人らに手厚く迎えられ、母とめでたく再会した。〔再会〕

この済州島の伝説と日本の「百合若説経」と比べてみると、済州島の伝説は母親の病気のため、親孝行の弟が海上を遍歴し、孤島に放置されるのに対して、日本の「百合若説経」は部下の裏切りによって孤島に置き去りにされるという違いがある。また「百合若説経」に見られる〔獣変身〕のモチーフは、弟の両眼を抉り抜くという兄の残虐な行動によ

る〔弟の盲目〕がこれに対応するものとなっている。あるいはまた「百合若説経」では、遍歴・流浪の旅をした百合若と妻の輝日の御前などが最後に神様として示現するのに対して、済州島の伝説ではこの叙述が見えない。こういうことから済州島の伝説を日本の「百合若説経」に直接結び付けるのはきわめて難しいと言えよう。この済州島の百合若伝説と同じ系統で文献として記録に残ったものには、一四四七年成立の仏教説話である「善友太子」と、一七○○年の成立と推測される、『赤成義伝』（朝鮮時代の小説）などがある[9]。

３．２　建築神の前世物語としてのシャーマンの本解「成造クッ」

日本の「百合若説経」の成立を考えるとき、見逃せない、また日本の「百合若説経」に一番近い内容を持つものが、韓国のシャーマンによる本解「成造クッ」である。

韓国のシャーマンは自分の意志によるのではなく、神様の勝手な選択によって、原因が分からない病気にかかって苦しむ。これを巫病というが、その期間は巫覡によって様々であるが、長い人は30年以上も続く場合がある。この厳しい苦しみを克服し、「成巫式」という儀礼を行なってはじめて新しい巫覡が誕生する。「成巫式」を済ませ、神の神託を受けたということですぐ祭りなどを司る巫覡となるのではない。神母（シンオモニ）という親シャーマンに教わりながら、厳しい修業過程を経て一人前の巫覡となる。韓国ではこういう巫覡のことをムーダンと読んだり、菩薩さまと呼んだり、あるいは法師さまと呼んだりする。このように巫覡は自分の厳しく苦しい遍歴・苦難の体験を通じて、祭りを司るのは勿論、人の苦しみや病気治療などの役割を果たすのである。

こうした韓国のシャーマンが祭りの現場で唱えるものが、本解「成造クッ」である。この本解「成造クッ」は、「城主クッ」とも表記され、韓国全土に広く伝承される祭文で、家を新しく建てた時と引っ越しをして家主が建築神である城主神を新しく迎え入れるときに行われる「成造迎え」（成造クッ）巫祭において唱えられる祭文である。巫女は紅天翼の服を着て紅色の笠を被り、約一メートルほどの松の木に白紙一枚を糸で括った「成造竿」を持って庭に出て城主神を呼び降ろして遊ばせた後、祭文を唱える。

その「成造クッ」は、

○　成造の祖父は誰なのか、国飯王氏ではないのか。成造の祖母は誰なのか、月明夫人ではないのか。成造の祖父の挙動をご覧ください。玉皇上帝に疎まれ松種を五つ、五斗、五升、借りて来て、地下に降りて来て疊疊青山の深い所に木を植えるのを楽しみにし、成造の祖母の挙動をご覧ください。万疊青山の山の下、中に木を育てることに力を尽くすとき、成造の父親は誰なのか、天宮大王ではないのか。成造の母親は誰なのか、玉真夫人ではないのか。天宮大王と玉真夫人が十七歳に会って結糸青糸を結んだ夫婦の仲。十八歳に初産していつも長男の話ばかりして細波のように育てるとき、成造の父親の挙動をご覧ください。西天西域国に入り、内裏を高く建てて内外宮城を選び出し、王座に高く座って一対の玉璽を手に持って六国朝貢、朝会をもらい、満朝諸臣に侍衛され、億兆蒼生を抱えて国事に力を尽くすとき、（中略）成造の姓はオム氏であり、堂号（堂宇の号）はチェシンであり、別号は成造です。天上にいらっしゃったとき、五歳から字を読み始め、七歳・八歳には詩伝書伝（詩経と書経）、九歳・十歳に四書三経のあらゆる術法をすべてマスターし、十五歳に天上界の第一の大工になって、天上の月下宮を（建てる仕事）を委ねられ、玉を選んで礎にし、金を削って柱を作り建て宝石のように飾り、……（韓国精神文化研究院アンチュングン図書所蔵本[10]）　〔神迎え・内裏建立〕

と始めるもので建築神であり、家内の安泰・無病息災と幸運・財運を司る成造神の由来を叙述する本地物語である。前述の「百合若説経」でも見られたように、右では先ず巫覡が建築神である成造の祖父と祖母、次には成造の母親と父親を神降ろして、成造の父による内裏建立の大事業が語られ、最後には建築神である成造が神降ろされ、建築の過程が述べられるのである。その梗概を示すとおよそ、次のようになる[11]。

〈発端〉

（一）西天西域国に住む天宮大王と妻の玉真夫人は、それぞれ三七歳と三九歳になるまで一人の子供もないことを嘆き、占い師の言う通りに神仏に申し子をする。初更の夢を見たところ枕の上には菊の花が三輪咲いており、三更の夢では宮中に五色の雲が舞い上がる中で黄鶴に乗った仙人が夫人の傍らに現れ、「夫人よ驚き給ふな、私は兜率天宮の王である。夫人の功徳と精誠至極なる故天皇それに感動し、諸仏の指示により子を授けに参りました」と言い、日月星辰の精気を集めて童子を作って夫人に手渡す。やがて玉真夫人は懐妊し、玉のような若君が生まれ成造と名付ける。〔申し子誕生〕

（二）玉真夫人は喜んで占い師を呼んで若君の相を占ってみると、「額が高ければ少年に功名を成さん、鼻先が高ければ富貴功名疑ひなし、両眉間が深ければ妻を虐待せん、額の左右側が低ければ二十前十八の歳に無山千里無人島なる黄土島に三年間流されん」と、妻を冷遇した罪で三年間無人島に流される運命であることを告げる。玉真夫人は成造の生れつきの非運を嘆き悲しんだ。〔博士の占い〕

（三）成造は元気に育ち、三歳のときに言葉を覚えて蘇秦や張儀に優るほどの達弁であった。十五歳になったときには詩経や書経などの諸子の書物を読破し読まぬものはないほどであった。その頃地下国では家を建てることも知らず、森の中で暮らしており、暑い日や寒い日には大変苦労していた。成造は地下国に降りて誰も住まない山に入って家を建てる木材を探し始めたが、その仕事は意外に容易ではなかった。そこで現状を書状に細かく記して玉皇上帝に訴えかけた。成造は玉皇上帝の命令を受けた帝釈宮から木の種を受け取って山にその種を蒔いて、十八歳で山を下った。〔入山〕

（四）ある日、成造の父・天宮大王は群臣を集めて成造の結婚相手を探すように命じた。そこで機織りに長じ、嫁の資質を備えている美しい皇輝宮の桂花〈ケファ〉姫が選ばれる。成造は金冠朝服をまとって御輿に乗って満潮の百官が立ち並ぶ中を通って皇輝宮に入り、そこで桂花姫と婚礼を挙げ夫婦の契りを結ぶ。〔結婚〕

〈展開〉

（五）結婚した成造は妻の桂姫を蔑ろにしひどく虐待した。また酒と女に溺れ国事を疎かにして放蕩三昧の生活を送った。それが長く続くと朝廷の諫臣達はこの事実を密かに天宮大王に報告した。怒った天宮大王は成造を呼んで罪状を告げて三年間の島流しを命じた。成造は三年分の食料と衣服を携え、母の玉真夫人と臣下達、宮女達と別れを惜しんで帆を上げた船に乗って黄土島に向かって出発する。〔臣下の裏切り・王の勅定〕

（六）数日間の航海の後、成造の乗せた船は黄土島の近くに至った。成造は、「無情なれや東南の風よ、軽広船を促すこと勿れ。山も見慣れし山ではなく、水も見慣れし水ではなし。……三年の流刑を誰と暮らすべきか、大王様も情けがなく、朝廷の諫臣も薄情なり、我が運命も哀れなもの。我に何の重罪あって、二十前十八歳にして無人島なる黄土島に三年間流されるぞ」と、涙を流し自分の身の上を嘆いた。船頭達は三年分の食料と衣服とともに成造を一人孤島に残して本国に戻る。〔孤島放置〕

〈展開〉

（七）黄土島で三年の流刑生活を過ごした成造は、本国からの放免の知らせを待っていたが、どうしたことか四年が過ぎてもその知らせはこなかった。飢えと寒さに耐えかねた成造は海岸の山に登って松の皮を剥いて食べ、海草などを採って命を繋いでいった。長い間火食をしなかったため成造の体の全身には毛が生え、動物なのか人間なのか区別がつかなくなった。甲子の春三月のある日、成造は飛んできた青鳥が鳴くのを見て、「懐かしき青鳥よ。どこへ行って今来たのぞ、人跡未到のこの島に春光を尋ねて来たならば我が一封の文を持ちて西天国に帰り往き、名月閣に寄せ呉よ、名月閣の桂花夫人はわれと百年の君なるを」と言って、手紙を書こうとしても硯も墨もなかった。破れた帯の端を引き裂いて薬指を噛んで流れた血で便りをしたため青鳥に託すと、青鳥は西天国に向かって空高く飛んでいった。その頃、西天国の桂花夫人は夫の成造を偲んで泣き嘆いていたが、飛んでくる青鳥を見て、「鳥よ、青鳥よ、お前は有情な鳥なれば天下を周遊し、黄土島に入り往きて家君太子成造様が死んでいるか生きているか、生死存亡を知りて、私の許に寄せてくれよ」と詠うやいなや、青鳥は口に銜えていた夫からの手

紙を桂花夫人の前に落として飛び去った。〔鳥の文使い〕

（八）妻の桂花夫人と母の玉真夫人は成造の無事を知って喜び、天宮大王もその手紙を読んで心を痛め涙した。天宮大王は諫臣達を遠方へ流罪に処した。〔報復〕

（九）天宮大王は臣下達に直ちに黄土島に入り、都まで成造をお供するように命じた。黄土島に入った船頭達は助けを求める成造の声を聞いて、かつての太子とも知らず獣が人の声を出しているのだと思い、「汝は獣なるか、人間なるか」と聞いた。成造は、「これ見よ、船頭達よ、私は他の人にあらず、西天国の太子成造なるが、……火食を食わざりしため、全身に毛が生え、見知り難くなり居るも、私も矢張り人間なり」と身分を明かし、都の様子を尋ねる。〔獣変身〕

（十）船頭達は神に航海の安全を祈る祭祀を行なった。黄土島を発った船は順風に乗り、成造は無事に西天国に着き父の天宮大王の前で礼拝した。〔帰国〕

〈結末〉

（十一）大王は成造の帰国を喜び、監獄に入っている罪人と流刑の罪人を皆釈放し、縁起の良い日を選んで大宴を催した。成造は妻の桂花夫人とめでたく対面し、その夜を一緒に過ごすとき、兜率天宮から産神が降り桂花夫人に五人の男の子と女の子を授けた。〔恩赦・再会〕

（十二）成造は十人の子供と共に山に入り砂を掘って鉄を集め各種の道具を作り、大工を集め内裏と民の家を建て始めた。また、自ら家を建てる敷地の選定から屋敷を堅める作業を行なった。屋敷を堅める際にはいちいち石を取り除き、高い所は低め、低い所は高めて平地を均し、その上に家を建てた。 五行をもって礎を据え、仁義礼智をもって柱を建て、日月を窓や戸と成し、太極の紋様で飾った。陰陽を案じて天井を張り、万巻の書物で床を飾った。五色の土で壁を塗って五彩の窓を作り、広く豪壮な家を建て終えると、方位を診て東と南に門を構えた。磁石を取り出して二十四の方位を調べたところ、東の青竜山は火神を鎮め、南の朱雀山は官庁の災難と口舌の禍を防ぎ、西の白虎山は子孫の成長を護り、北の玄武山は財産の損失を防ぐ方位であった。このように成造は家と屋敷固めを唱えた後、「開門万福来、掃地黄金出、天増歳月人増寿、春万乾坤福万家……堂上鶴髪千年寿、膝下児孫万歳栄」と立春書を記し、「応天上之三光、備人間之五福」と上棟文を書いた。〔屋敷堅め〕

（十三）立春書と上棟文を書いて上棟に貼って置いた後、成造は建築神である立柱成造神、妻の桂花夫人は身柱成造神として現れる。成造の五人の息子は五土神、五人の娘は五方夫人となる。建築に携わった大工の頭は兜を被り、長槍を持ってあらゆる災難と厄から守り、百の邪気と五方の悪運を防いだ。〔神々示現〕

そして、この本解の結末は、

○　昔から成造様は家々にいらっしゃって建築神となり、上棟に座定なさって、（成造神よ）どうぞ降臨なさいませ。（韓国精神文化研究院アンチュングン図書所蔵本[12]）

と叙述され、物語は終るのである。

次には普通のクッと同様に、「別星クッ」「大監コリ」「帝釈コリ」「ホグコリ」「軍雄コリ」「倡夫コリ」の順序で個別儀礼を行なった後、招いたあらゆる神々を送り返す「テイッチョンコリ」祭を最後に「成造クッ」巫祭はすべて終了する。〔神送り〕

4．大分柞原（宇佐）八幡神の前世物語「百合若説経」と韓国の建築神の前世物語「成造クッ」

前述したように本解「成造クッ」は、韓国のシャーマンによって伝承されているもので、建築神の前世を叙述する本地物語である。その内容は、神仏の申し子である成造が部下達の裏切りによって無人島に島流しされ、置き去りにされるが、青い鳥に託した手紙によって帰国することができる。そして裏切った部下達を退治し、最後には建築神として現れるという内容である。日本の「百合若説経」も観音の申し子である百合若が部下の別府兄弟の裏切りによって無人島に置き去りにされるが、普段可愛がっていた鷹に託した手紙によって帰国することができる。そして裏切った部下達を

退治して、最後には大分の柞原八幡神、あるいは宇佐八幡神と現れるとう内容で、韓国の「成造クッ」は日本の「百合若説経」の内容と非常に似ていることがわかる。また、両者はシャーマンによって伝承されるという、信仰の背景においてもその一致が見られる。両者のモチーフ構成を対照して示すと次のようである。

右のように、「大分の伝説」、幸若舞の「百合若大臣」、シャーマンの「百合若説経」と韓国シャーマンの「成造クッ」の中で、「百合若説経」と「成造クッ」がそのモチーフ構成・内容において一致していることがわかる。今まで論じたことをまとめてみると次のようである。

①諸本の中で大分柞原（宇佐）八幡神の前世を語るシャーマンによる「百合若説経」と韓国の本解「成造クッ」の間にそのモチーフ構成・内容において一致が見られる。また、両者は同じシャーマンによって伝承されている。今まで両者の関わりを指摘した研究はなかった。

②「百合若説経」では物語の一番初めに〈内裏建立の段、鬼神揃神明帳〉の章が置かれ、結末のところに＜屋敷堅弓打初之段＞が設けられている。その理由は何なのか。従来の諸先学の研究ではその理由を追求した論考はなかった。私は「百合説経」はもともと建築神の由来物語であり、百合若は建築神であったと推測している。それは日本の「百合若説経」とほぼ同じ内容を持つ韓国の「成造クッ」が建築神の由来物語であることから裏づけられる。

③「百合若説経」は、大分（豊後）の柞原八幡、宇佐八幡、佐賀（肥前）の淀姫神、玄海島の小鷹大明神、壱岐の手長男神社の神の前世物語となっている。ここは主人公の百合若が苦難を受けながら遍歴の旅をした場所でもある。また、対馬にもこの「百合若説経」がシャーマンによって伝承される。さらにこの「百合若説話」が韓国のシャーマンによって伝承されている。以上のことから「百合若説話」の伝播経路は、韓国－対馬－壱岐－玄海島－佐賀－宇佐－大分市のルーツが考えられる。またこのルーツから日本の百合若説話の故郷は九州、大分と言うことができる。

5．大分の宇佐八幡と韓国

では、韓国のシャーマンによる本解「成造クッ」が前述のような経路を経て大分、特に宇佐地方に伝わったならば、その巫覡集団というのはどのような集団であったのかが問われなければならないであろう。

正和二年（一三一三）に成立した『八幡宇佐宮御託宣集』には、八幡神は辛国（朝鮮半島）から来ているとも記され、八幡神が外国から渡来した神であることを語っている。また、宇佐神宮の八幡祭祀集団の中で、朝鮮半島からの渡来氏族である辛嶋勝意布売（からしますぐりおふめ）が禰宜（古くは最高の位）、つまり神に仕え、託宣などをする巫女の役割を担っていた[13]。あるいは、宇佐（豊国）には〈豊国奇巫〉の存在が知られている。『新撰姓氏録』（八一五）和泉・神別の条には、

巫部連（かんなぎべむらじ）

雄略天皇御躰不予みたまふ。因りて茲に、筑紫の豊国の奇巫を召し上げたまひて、真椋をして巫を率て仕へ奉らしめたまひき。仍りて巫部連の姓を賜ふ。

とあって、豊国に普通とは違った奇巫（シャーマン）が天皇の病気治療のため呼ばれている。また、『日本書紀』用明天皇二年（五八七）四月二日条には、〈豊国法師〉が用命天皇の病気の時に呼ばれたことが記されており、『続日本紀』大宝三年（七〇三）九月二十五日条には、「癸丑、僧（ほうし）の法蓮に豊国の野四十町を施し、 毉術を褒めたるなり」と記されている。この毉術の漢字に注意してみると、毉の下に「巫」の字が付いていることから僧の恰好をして治療の活動を行なうシャーマンであることが推測される。韓国では巫覡が祭りを司る役割だけを担っているのではなく、治療の活動も行っているが、彼らを法師さまと呼ぶこともあり、＜豊国法師＞の法師との関連が注目される。あるいはまた、『続日本紀』養老五年（七二一）六月三日条には次のような記録が見える。

六月戊寅。詔して曰く沙門（僧）法蓮は心、禅枝に住み、行は法梁に居れり。尤も毉術に精しく民の苦しみを済ひ治む。良き哉。若き人、何ぞ褒賞せざらんや。その僧（ほうし）の三等以上の親（族）に宇佐君の姓を賜ふ。

ここで注目すべきことは毉術の毉の下に「巫」が付いている点である。すなわち法師の法蓮は僧の恰好をしていながら、医療活動をするシャーマンであったことが考えられる。『続日本紀』には＜医術＞に相当することばが七例載るが、法蓮の二例だけは「毉術」と書き他はすべて「醫術」である。特に「毉」と書き、「巫」が付いている[14]。中野幡能氏は『八幡信仰[15]』において、「豊国の宗教、文化の特異な一つに「豊国奇巫」がある。それは五世紀にはすでに参内して天

皇の病を治したとういうことがあり、それは豊国の文化がいかに高かったのかを物語る。これは渡来文化のたまものである」と論じておられる。また、宇佐の渡来文化はかなり古くから入っていて渡来文化（辛嶋氏）と国造文化は共存しながら六世紀まで続いてきたと言える[16]。こうした文化の中から日本に珍しい豊国奇巫、豊国法師が生まれたと言える。あるいはまた、豊国のシャーマニズムが朝鮮半島のシャーマニズムともつながりを持っていたことは宇佐八幡神の巫女として活躍した辛嶋勝（からしますぐり）の集団が新羅系の渡来氏族であったことからも推測することができる[17]。

以上のことから考えると「百合若説経」は、大分（宇佐八幡）に本拠地を置き、朝鮮半島のシャーマンにつながりを持っていた八幡神の祭祀集団によって運ばれた可能性が高いと言える。宇佐八幡が位置している豊前国は、周防灘、国東半島、別府湾など、いわゆる瀬戸内航路の海上交通の中心地であり、早くから先進文化である渡来文化を受け入れたところであったのである。

6．おわりに

私は、以前大分県三重町の講演会でも提案したが、大分が真名野長者伝説（炭焼長者）の故郷であり、それはまた、韓国の伝説と深く関わっていることを指摘した。そこで私は共通の伝承基盤を持つ大分と韓国が協力して観光都市として活性化を図る必要があることを呼びかけた。例えば、両物語のゆかりの地の訪問、ホームステイなど[18]。今まで論じてきた韓国と大分の百合若説話からも同じことが言えよう。日本と韓国の関係について考えてみると、一九六九年の国交正常化当時、年間一万人だった交流は、いまや一日一万人が行き来する時代となった。また、学校で日本語を学ぶ外国人は全世界で約二百十万人といわれているが、そのうち約九十四万人が韓国人である。学校の韓国語教育において言語学習とともに韓国の文化や歴史などを知りたいという学生が多いが、そのとき異文化についての理解を深めるためには、百合若説経のような共通の伝承基盤を持つ文化などを取り上げるのが有効であろう。あるいは今年九州では唯一、日本と韓国共催のサッカーのワールドカップが大分で開催される。これを契機に百合若説話からも学ぶように、古代から文化交流の中心地であった大分と韓国、さらには日本と韓国との文化交流を政府レベルよりは民間レベルで拡大させ、都市を活性化させる必要があろう。

注

1．『豊後伝説集』、『雉城雑誌』７、荒木博之編『日本伝説大系』第十三巻・北九州（みずうみ書房）所収.
2．福田晃氏『神話の中世』（三弥井書店　1997）の「『甲賀三郎』『百合若大臣』の神話的叙述」.
3．『折口信夫全集』15（中央公論社　1967）所収.
4．折口信夫前掲書.
5．『山口麻太郎著作集』１（佼成出版社　1973）の「百合若説経」.
6．『演劇博物館』77、1997．３.
7．福田晃・荒木博編『巫覡盲僧の伝承世界』第１集（三弥井書店　1999）所収.
8．秦聖麒氏『済州島の伝説』（ソウル白鹿　1992）.
9．拙稿「本解『成造クッ』と『百合若大臣』」（福田・荒木編前掲書所収）拙著『本地物語の比較研究―日本と韓国の伝承から』（三弥井書店　2001）.
10. 韓国精神文化研究院編『韓国口碑文学大系』２の９、1984.
11. 前掲（注９）書.
12. 前掲（注10）書.
13. 中野幡能氏『八幡信仰』塙新書59（塙書房　1985）.
14. 大和岩雄氏『秦氏の研究』（大和書房　1993）参照.
15. 前掲（注13）書.

16. 同上.
17. 上田正昭氏『日本の文化とは何か　神道と東アジアの世界』(徳間書房　1996).
18.「ＡＰＵ発　異文化の風　共通の伝説が刺激に」(『大分合同新聞』夕刊　2001年９月26日）に講演内容が紹介されている。

付記

本稿は、第20回ＡＰＵ講座（2001年11月17日）の講演の草稿をもとにして作成したものである。私の拙い講演にもかかわらず、席上活発なご質問とご意見をいただいた市民の皆様方に深く感謝申し上げる。